第 326 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

地上の長い旅路を歩む ～ 様々の責任を全うする ～

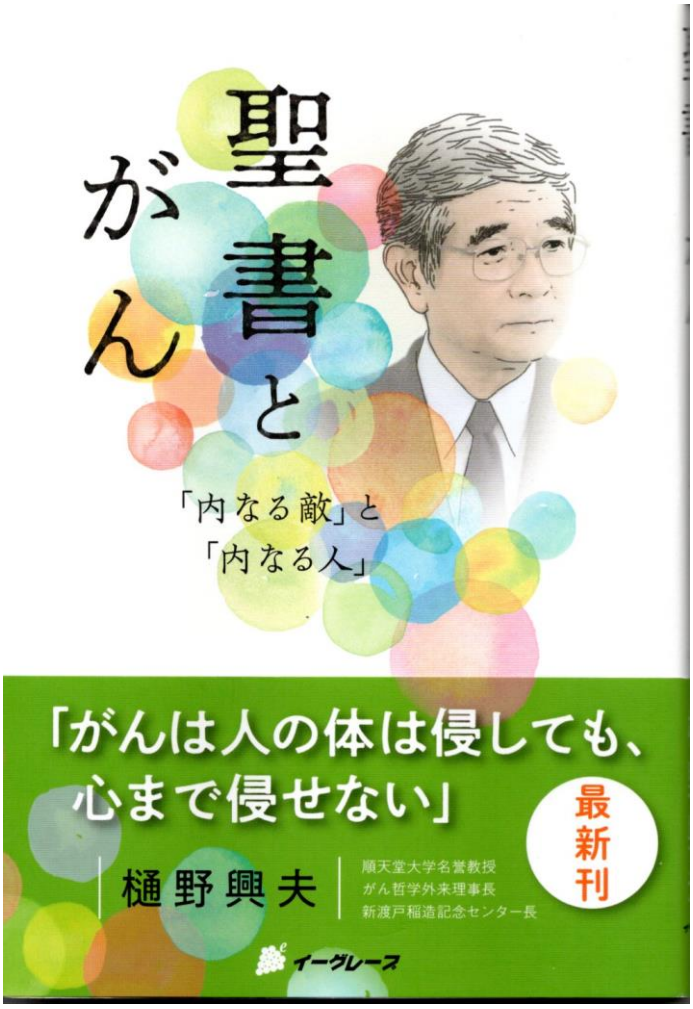
2025 年 4 月 29 日は『昭和の日の祝日』である。 今朝の朝日新聞に『国内最高齢 115 歳の女性死去』と記載されていた。 最近、小学校、大学の授業、市民の講演会で、『人間の寿命』が話題になる。【人類は、遅かれ早かれ 120 歳で死ぬ(旧約聖書 創世記 6 章 3 節)。『アダムは 930 歳、ノアは 950 歳、アブラハムは 175 歳、モーセの時代から 120 歳』】と、いつも『さりげなく』語る。

聖書の『エデンの園』の出来事が【『聖書とがん』2020 年 10 月 20 日イーグレープ出版社】(画像)へと導かれていった道筋だった。【『人類は、なぜ、永遠に生きられないのか？』、『人間は生きて 120 年』、『なぜ、イブは、蛇の誘惑に負けたのか』】。

筆者の母 樋野壽子(1923 年 2 月 20 日 ～ 2019 年 6 月 3 日)は、午前 5 時 35 分 島根県出雲市大社町鵜峠の自宅に於いて、安らかに 96 歳の天寿を全うした。 母の兄達は、太平洋戦争で戦死し、末っ子の母が家を継いだ。 葬儀では、筆者は、喪主として、『天寿を全うし、地上の長い旅路を歩み、様々の責任を全うし、召された母に深い敬意を払います』と挨拶をした。

筆者の名前は、息子を戦争でなくした祖父の樋野卓郎(1888-1972)が、家を継いだ末娘（母）の 3 人の子供（誉・誠・興夫）の末っ子の長男：筆者に『家を興す』の願いを込めて名付けたと聞かされた幼年時代の想い出が鮮明に脳裏に蘇る。そして、『興』は『われ Origin of fire：***樋野興夫（ひの おきお＝火のおきを！）***：たらん』(to be 出版 2005 年)(画像)の発行が実現したものである。

筆者の父(樋野廉平)は、2013 年 5 月 5 日(こどもの日）に 92 歳で逝去した。 父は婿養子で、貨物船やタンカーの機関長をしており、年に 1、2 カ月しか帰らなかった。 筆者は、1954 年 3 月 7 日、出雲大社から北へおよそ 8 キロにある島根県簸川郡大社町(現出雲市）の鵜峠で生まれた。『出雲風土記』にも登場する、日本海に面した小さな村である。 家族と『天国でカフェを開催する』のが、筆者の大きな夢である(画像)。


聖書とがん
「内なる敵」と
「内なる人」
「がんは人の体は侵しても、
心まで侵せない」
最新刊
樋野興夫
順天堂大学名誉教授
がん哲学外来理事長
新渡戸稲造記念センター長
イーグレープ

われ Origin(オリジン) of(オブ) fire(ファイヤー) たらん
がん哲学余話
順天堂大学医学部病理学教授
樋野興夫 著